

# 喫煙に対する潜在的・顕在的態度とその変容可能性

——潜在連合テストによる検討——

○小林正法・大竹恵子（関西学院大学・応用心理科学研究センター）

キーワード：喫煙，潜在的態度，顕在的態度，態度変容

## 目的

喫煙は様々な疾病のリスク要因であるため，自身の喫煙行動だけではなく，非喫煙者であっても受動喫煙対策をすることは健康において重要である。しかしながら，すべての非喫煙者が受動喫煙を回避するわけではない。実際，大竹(2014)は，（前熟考期と呼ばれる）非喫煙者で将来の喫煙可能性が低い人たちの中でも，他者の喫煙や受動喫煙に対する行動パターンが異なる4つのステージ（受動喫煙容認期・嫌煙低期・嫌煙中期・嫌煙高期）に分類できることを提案し，受動喫煙を容認する人ほど喫煙風景画像に対する良い印象を持っていることを明らかにしている。それでは，なぜこのような受動喫煙への認知や行動の違いが生じるのだろうか。その1つに潜在・顕在を含む喫煙への態度が影響していることが考えられる。

そこで本研究では，大竹(2014)のステージ分類において，受動喫煙を忌避している嫌煙高期と容認している受動喫煙容認期の対象者をとりあげ，受動喫煙に関わる態度の違いが見られるかどうかを明らかにする。喫煙は回避すべきという社会的規範が存在するため，本研究では喫煙に対する顕在的態度だけではなく顕在的に表出しにくい態度とされている潜在的態度(Greenwald & Banaji, 1995; Nosek et al., 2007)を測定した。加えて，喫煙に対する態度変容手法を用いた場合に，顕在的態度だけでなく潜在的態度も変化するかについても検討した。

## 方法

**参加者** 大竹(2014)のステージ分類により，スクリーニングを行い，嫌煙高期群19名（男性3名，女性16名），受動喫煙容認期群15名（男性5名，女性10名）が実験に参加した。

**倫理的配慮** 本研究は関西学院大学の研究倫理審査委員会による承認を受け，インフォームドコンセントや書面による同意を取得した上で実験を行った。

**刺激** 潜在的態度測定に，タバコ関連画像，タバコ非関連画像を各4枚，接近関連語，回避関連語を各4語用いた。また，顕在的態度測定に，喫煙風景画像を19枚用いた。態度変容に，「今から始める喫煙防止教育（2版；日本循環器学会禁煙推進委員会）」内の一般・大学生用の喫煙防止動画を用いた。

**課題** Brief Implicit Association Test (Sriam & Greenwald, 2009)を用い，喫煙に対する潜在的な接近・回避の態度を測定した。Brief IATでは，画面中央に呈示された画像または単語のカテゴリを素早く判断するよう求めた。刺激が「タバコ」か「回避」を判断する条件，「タバコ以外」か「回避」を判断する条件を設けた。潜在的連合が高いカテゴリ同士を判断する条件で判断時間が速くなるとされる。Brief IATで用いられるバイアス得点（Dスコア）を算出し指標とした。また，顕在的態度として，喫煙関連画像に対し，SD法による評価（良い・悪いなどの6次元）を求め，その評価得点の合計を指標とした。

Dスコア，評価得点ともに値が正であるほど，タバコに対する回避または否定的評価を示す。

**手続き** 小集団で実験を行った。Brief IAT，画像評定の順で行った後，動画刺激を呈示した。その後，再度，画像評定，Brief IAT，デブリーフィングの順で実施し，実験を終了した。

**分析方法** 各従属変数を混合効果モデルで分析した。固定効果に性別，年齢，群，時期，群×時期の交互作用，変量効果に参加者を用いた変量切片モデルで分析を行った。

## 結果

**顕在的態度 (Fig.1a)** 嫌煙高期群の方が容認期群よりも画像の否定的評価が有意に高く( $b=19.72, p<.01$ )，動画視聴前よりも視聴後の方が否定的評価は有意に高かった( $b=6.84, p<.01$ )。一方，交互作用は有意ではなかった( $p=.90$ )。

**潜在的態度 (Fig.1b)** 各群，各時期のすべてでDスコアは有意に定数(0)より大きく( $ps<.01$ )，一貫して喫煙に対する回避的な潜在的態度が見られた。一方で，Dスコアについて，群，時期の各主効果，群×時期の交互作用は有意ではなく，潜在的態度に群や時期による差はなかった( $ps>.56$ )。

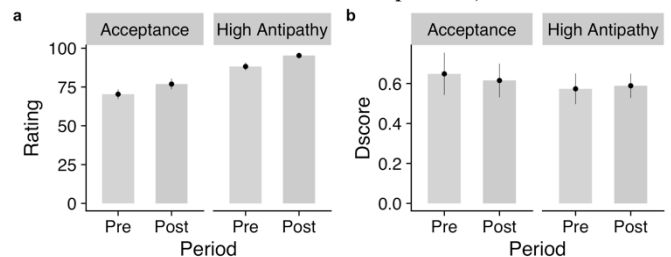


Figure 1. Explicit (a) and implicit (b) attitudes toward smoking. Note: Error bars indicate  $\pm 1$  SE.

## 考察

実験の結果，受動喫煙容認期は嫌煙高期よりも喫煙への否定的な顕在的態度を示した。さらに，ステージに寄らず，喫煙防止教育動画によって，顕在的態度が否定的に変化することも示された。一方で，潜在的態度に関しては群および動画視聴による差が見られず，一貫して喫煙への回避的な潜在的態度を示していた。喫煙者は喫煙への接近的，非喫煙者は回避的な潜在的態度が見られること(De Houwer et al., 2006)を考慮すると，接近・回避という潜在的態度は喫煙に対する依存や欲求(wanting)を反映しており，非喫煙者内では差が見られないのかもしれない。また，ステージ分類は行動パターンによる分類であるが，喫煙獲得に社会的要因(家族や友人)が影響するように(e.g., Leonardi-Bee et al, 2011)，潜在的には喫煙を回避するという態度を持ちつつも，社会的要因によって，喫煙への対処行動の表出が抑制されている可能性がある。したがって，今後はこれらの点を考慮した検討が重要である。利益相反開示：発表に関連し，開示すべき利益相反関係にある企業などはありません(KOBAYASHI Masanori, OTAKE Keiko)